

〈学術論文〉

井上ひさし「ナイン」論

—共同体がもたらす蔭—

著 田中 伸 八尾市立成法中学校

監修 友田義行 信州大学学術研究院教育学系

キーワード…共同体、野球、権力、都市論

一 はじめに

本研究は共同体という視点を中心として井上ひさし「ナイン」を読解していくことにより、新たな解釈の可能性や作品主題を提言することを目的とする。

井上ひさし「ナイン」は、一九八三年一二月に講談社が発行している『IN☆POCKET』に掲載された作品である。また、発表から現在に至るまで、一〇社二七冊の『高等学校現代文』や『高等学校国語総合』の教科書に採用されている。本作品は従来、「時が流れても変わることのない、ナインの信頼や友情」を主題として解釈されてきた。二〇一四年三月に三省堂が発行した、現行の『明解現代文B』の教科書においても「社会の変容に伴う人間関係の変化と、時代を超えた信頼や友情について

考えを深める。」一ことが、本作品を学習するときの目標として設定されている。

しかし、新道少年野球団のキャプテンであった正太郎が大人になってから、かつてのチームメイトに対して行う詐欺は、彼らの生活を壊し、命をも脅かすものである。それでもなお、ナインの中には正太郎への信頼感が存在しており、彼らは本当に友情で結びついていると言えるのだろうか。本研究では新道少年野球団ナインという一つの共同体を、その中に存在する権力や序列といった側面から解釈することによって、信頼や友情といった従来のものとは異なる、新たな作品主題を追究していく。

研究の方法を以下に述べる。本研究では、先行研究や「ナイン」掲載教科書の教師用指導書をもとに従来の作品解釈や作品主題を明らかにしていく。その上で、ナインという一つの共同体の姿を視点の中心とすることによって、新たな作品解釈・作品主題について考察を進めていく。

また、戦後日本における野球の位置付けや、作中に描かれる登場人物の世代やポジションが持つ意味合いを明確にすることによって、本文の描写や登場人物の言動に対してより詳細な意味づけを行っていく。特に、正太郎が決勝戦でつくり出す蔭がもつ意味について追究をする。作中には、その蔭と大会社のビルが対比的かつ、重なり合うかのように描かれている。そのため、二つの蔭を関連付けながら、正太郎の蔭がもつ意味について追究していく。

二「これまでの「ナイン」の位置付け

二・一 従来の「ナイン」主題

宮田茂は「ナイン」の友情（『国語教室』第三六巻、一九八九、一八一―一九頁）の中で、「この作品は友情というテーマを真正面から取りあげている。しかも、かなり具体的な形で描かれているので、高校生に対してかなりインパクトの強い小説教材であると言えよう。」と述べている^{二〇}。さらに、正太郎が決勝戦でつくり出した日蔭を、

心と心が強く結び合うには、お互いが何かをきっかけとして心を開く必要がある。「ナイン」における日蔭はまさにそれにあたる。炎天下の決勝戦という共通の体験を通して作られた、思いやりと信頼に結ばれた友情の証である。後の正太郎の詐欺行為に対する英夫のとらえ方に見られるように、多少のことではゆるぐことのない友情の輪がナインの間で生まれたのである。

と意味づけている^{二一}。日蔭は友情の象徴であり、炎天下での決勝戦という共通体験によって、ナインの中に確固たる友情が生まれたのだとしているのである。川田裕美子は「ナイン」（井上ひさし）について―生き続ける友情の絆（『国語教室』第五四巻、一九九五、二〇―二三頁）の中で、苦楽を共にした新道少年野球団の仲間の行為であるにしても、何故正太

郎の詐欺を正当化して許すことができるのか、という疑問が作中語り手である「わたし」にも読者にも残るとし、その理由を決勝戦の日蔭から次のように考察している^{四〇}。

自らも強い日ざしにバテているはずの正太郎が、先頭になって人垣で日蔭を作り、午前中の準決勝から投げ続けている英夫や、弱虫の常雄を休ませようと気遣った話は、目頭を思わず熱くさせるものがある。相手チームの攻撃を抑えなければならぬという重圧のあまり、孤独な心理状態に陥りがちな投手にとつて、共に闘う八人の仲間が存在が見え、改めて「ナイン」で闘っているのだという連帯感、一体感を認識したことは間違いない。そのときの感動が、二十年近く経った今なお、英夫の中で生き続けているということなのだ。

宮田同様に、正太郎が決勝戦でつくり出した日蔭によってナインの結束が高まったとされており、その思い出が正太郎の詐欺行為を許す英夫の心情につながっていると述べられている。大屋敷全も「読みが深化する授業を目指して―時代背景、対比を意識した「ナイン」の読解」（『月刊国語教育』第二八巻、二〇〇八、一六一―一九頁）で、

「ナイン」においては、高度経済成長等によって、街も人の心も変わってしまう中で、昔の美しい思い出を大切に、かつての仲間

である正太郎を信じる英夫たちの心が重要なポイントである。

と述べており^五、時代の移り変わりに伴う街や人の変化と対照的に、変わることはないナインの友情を中心として解釈されてきたことが分かる。ただ、ナインの友情を手放しに信仰するような読み方に異を唱える先行研究も見られる。渥見秀夫は、「井上ひさし『ナイン』の中の「ナイン」と「握手」（『愛媛国文と教育』第二七巻、二〇〇四、一一―一頁）の冒頭部で、

今や詐欺師に転落したかつてのキャプテン正太郎に対する秀夫（や常雄）の変わらぬ友情の特異さに足を止めれば、一応はそれでよい作品と言えよう。

と述べており^六、ナインの友情を批判的に捉えている。しかし、その特異さについて、

仲間を作りチームを作り、決勝戦で日蔭を作った正太郎のカリスマ性は、「町内」の子供たちの「普通の」つながりが生み出したものなのであって、そのつながりが消えてしまった今、切り取られた断片的なエピソードの前面のみが劇的に語られるために、「特異な」友情の印象を与えてしまうのである。

とも述べており^七、野球以外での彼らの関係性を踏まえれば、ナインたちの友情の特異さは拭かれるとしているのである。

このように、先行研究において「ナイン」は、「時が流れ、街や人、生活が変わったとしても変わることのないナインの信頼、絆、友情」を主題として解釈されてきたのだ。

この解釈は、「ナイン」掲載教科書の教師用指導書においても共通している。一例として大修館書店、教育出版の教師用指導書に明示されている主題を以下に挙げる。

「ナイン」は、四ツ谷駅前にある新道通りを舞台として、終生忘れることのできない体験を通して結ばれた人間の絆は、時が流れ社会は移り変わろうとも、切れることがないということを主題としている^八。

困難をともに乗り越える中で生み出された、仲間への信頼や誇り。そしてそのかけがえのなさ。その信頼や誇りは、時がたち、町や人は変わっていつても、人の心の中に変わらずに生き続けている^九。

ここでも、時の流れの中でも変わることのないナインの信頼、絆が主題とされていることが見て取れる。さらに、監督不在の中でもナインだけ

で戦い抜いたことを自信として、彼らが抱いている誇りも主題の中に位置づけられている。その他の人社の教師用指導書の作品主題においてもこれらのキーワードは共通している。

教師用指導書は、本作品を教材として取り扱う教師のために書かれたものであり、教室で用いることを目的としない文学研究上の解釈として位置付けることは難しいかもしれない。しかし、以上の先行論を基にすると、「時が流れ社会が変わり、当時の新道商店街から失われたものが多くある中でも、ナインの中に今もなお残っており輝きを放っている信頼や友情、誇り」を主題として解釈されてきたといえるだろう。

二・二 従来の解釈における問題の所在

英夫は正太郎の詐欺行為を「ぼくらのためになること」として受け止めており、自分も常雄も詐欺を行った正太郎には感謝している、とまで語っている。このように、決勝戦で抱いた、「このナインにはできないこととはなにもないんだ」という信念を持ち続け、正太郎のことを一心に信じ続ける英夫の姿からは、確かに、仲間に対する友情や信頼といったものを読み取ることができるかもしれない。しかし、英夫によってその心情を代弁されている常雄は、正太郎の詐欺の被害を受けて、自殺を企図するところまで追い込まれている。常雄は本当に正太郎への感謝の気持ちを抱き、友情や信頼で結びついているのだろうか。

「ナイン」は題名が示唆する通り、野球が描かれた作品である。野球

はポジションや打順によって選手の役割や特性が異なるスポーツであり、一つのチームのなかに中心選手とそうでない選手が存在する。そのため、作中に示されているナインのポジションや打順も作品解釈の大きな手掛かりになると考えられる。新道少年野球団のエースピッチャーであった英夫と弱虫の八番打者であった常雄が正太郎に対して抱く感情は、本来に従来の解釈で述べられているように同じなのだろうか。稲井達也は、「井上ひさし「ナイン」を教える―物語の仕かけの向こうへ」（『国語展望』第九六巻、一九九五、二〇―二五頁）の中で、

ナインたちの共通体験は出来過ぎているといえなくもない。ある意味では、皮相な部分もはらんだ作品なのではないだろうか。例えば「途中、常雄がふらふらつとしかけましたが、その時も正ちゃんがいきました。『常雄も日蔭に入れ。遠慮するな。これはキャプテン命令だぞ。』って。」というせりふは泣かせるところだ。ここでは野球における監督やキャプテンの絶対の力が前提とされているのである。

と述べている¹⁰。新道少年野球団の中に存在する、力関係や権力といったものの存在に言及しているのである。稲井が指摘しているように、新道少年野球団を一つの共同体として位置づける視点で作品を捉え直し、チーム内における立場の違いや力関係から、ナインそれぞれの正太郎観

やナイン観を、特に英夫によって正太郎に対して抱いている感情を代弁されている、常雄の正太郎観を考察する必要があるだろう。

井筒満は「井上ひさし「ナイン」「握手」をめぐって」『文学と教育』第二一六巻、二〇一二、九三―七頁)の中で、

親父さんの中村さん、息子の英夫くん、それから「わたし」、世代の違うこの三人が、共通の問題について、真剣に考え、対話している。その問題というのは、壊れていく新道、壊されていく新道、また、それとつながっている正太郎の問題ですね。ぶつかり合ったり、対立したり、喧嘩したりということはあるが、そういう問題を、それこそ、「われら自身」の問題としてそれぞれが受け止めている。その受けとり方の中に、世代的特性が現われている。

と述べている^二。この指摘にあるように、「ナイン」には友情や絆といったテーマのみならず、同じ場所で暮らしている世代の異なる人々の生活が描かれている。共同体を中心に据える視点や、その中に表われている世代特性といった視点からの解釈が本作品の解釈の可能性を広げていくことに繋がっていくと考える。

ちなみに、「ナイン」に見られるこうした共同体論は、「われら自身の物語」の「隣り同士」や「記念写真」などにも認められる、この作品集

を一貫する問題でもあるのである。

また、先行論においては、正太郎がつくり出した決勝戦の日蔭が、ナインの友情を確固たるものとした存在であるとか、友情の象徴であるとして語っており、英夫はこの日蔭をめぐるエピソードを、自信を得た体験と面である。確かに、炎天下の試合で倒れそうになっていた英夫と常雄にとって、自分たちを救ってくれた正太郎の日蔭は忘れられないものであり、ナインが共に戦った証として解釈されても不思議ではない。

しかし、本作品に登場しているもう一つの蔭も踏まえた上で、正太郎の蔭の意味を考察する必要がある。もう一つの蔭とは、都市化によって建設された大会社の巨きなビルおほが作り出す蔭のことである。この蔭は、新道少年野球団ナインが熱戦を演じた外濠公園野球場に射し込む西日を遮断し、新道商店街の生活にも蔭を落とすのである。この「二つの蔭」は明らかに意識的に、対比的にかつ重なり合うかのように描かれている。正太郎の蔭が持つ意味を単独で考察するのではなく、大会社のビルの蔭と関連させながら意味づけていくことで新たな解釈につながっていくと考えられる。

三. 共同体から考える「ナイン」

三. 一 ナインの中に存在する序列・権力

ロバート・ホワイティングは、日本の野球選手が守るべきとされている一二の規則を示しており、その中で、チームの中に存在する序列について次のように述べている^{二〇}。

第一条 選手は、チームの序列に注意し、それを尊重しなければならない――

日本の組織のほとんどがそうであるように、野球チームでも垂直構造の序列がその特徴となっている。チームに所属するものは、上はオーナーから下はバット・ボーイまで、各人がはっきりと限定された立場をもつ。このヒエラルキーの中の各人の「ランク」は、年齢とチーム在籍年数によって定められる。

ロバート・ホワイティングが日本のプロ野球の中に存在する、と考えている規則について述べたものであるため、年齢や在籍年数が条件となつてはいるが、日本の野球チームの中には序列が存在しているという指摘は確かな事実である。

では、プロ野球チームではなく、商店街の同級生によるチームである新道少年野球団の場合はどうだろうか。確かに、ロバート・ホワイティングが述べているような年齢や在籍年数という点では序列は生じ得ないだろう。しかし、主将の正太郎を頂点とする序列が新道少年野球団の中

には存在している、ということが本文の叙述から窺えるのである。「新道少年野球団の四番打者で、捕手で、主将の正太郎」（七二頁一〇行目）と描かれているように、正太郎はチーム、打線、守備の中心を担っており、彼の存在がなければ新道少年野球団は成立しない。正太郎への依存度が極めて高いチームであり、そのチームの一員であるということは正太郎の姿や指示に従うということの意味していると考えられる。また、「主将の洗濯屋の正太郎くんが、小さな、準優勝のカップを抱いて」（七〇頁一六行目）、「大和屋がお嬢さん二人と出てきて、正太郎くんに御祝儀袋を渡した。」（七一頁四行目）という描写から、新道少年野球団ナインが努力の結果手に入れたものが正太郎に手渡されていることが分かる。準優勝カップも祝儀袋もナイン全員で戦った結果に対して贈られたものである。しかし、それらを実際に受け取り、掲げることができるのは正太郎ただ一人なのだ。そして、カップや祝儀袋と同じように英夫や常雄の努力の結晶である畳や売り上げ、さらには奥さんまでもが正太郎の手に渡っていくのである。

このようなチームの代表としての正太郎の姿や新道少年野球団ナインの中に存在する力関係が象徴されているのが、「正太郎くんの横には英夫くんがいた。その後で七人が団子みたいにかたまつて」（七〇頁一七行目）という描写である。これは、準優勝を祝うパレードの時のナインの並び方を描いた箇所である。英夫が炎天下の中でマウンドに立ち続け、日蔭

を作った正太郎への信頼が絶対的なものとなった決勝戦の直後のパレードであったために、自然とこのような並びになったとも考えることができる。

しかし、この描写には、信頼や友情で結びついていると考えられている、新道少年野球団ナインに存在する序列が表されている。正太郎のリーダーシップや実力は圧倒的なものである。その正太郎はもちろんのこと、横を歩く英夫もこのチームの中で絶対的な存在なのである。英夫はエースピッチャーであり、高校では西東京大会の決勝戦に進むほどの実力を備えている。正太郎同様、新道少年野球団の中心選手である。しかし、後ろを歩く他の七人は、正太郎にかたまっていることとチームの一員として存在しているメンバーなのである。これは決勝戦にはじまったことではないだろう。正太郎、英夫が中心選手である新道少年野球団の中には、常にこの力関係が存在しているのだ。ナインがチームとして一つにまとまっていることは間違いないが、その中には確実に序列が存在しており、対等な関係で九人がまとまっているとは言い難い。そのことがナインの並び方に表されているのだ。リーダーシップを発揮して集団をまとめることの負の側面や、彼らを結びつけている友情・信頼以外の要因が隠されているのである。

ナインの中に力関係や序列が存在した場合、本作品の主題を、「新道少年野球団ナインの時を超えた友情や信頼」に集約することが困難になっ

てくる。なぜなら、それぞれの立場によって正太郎観が異なるということが考えられるからである。お金を騙し取られたにも関わらず、「正ちゃんのおかげかな。」(七五頁一五行目)、「やはりぼくらのキャプテンなんですよ。結局は、ぼくらのためになることをして歩いているんだ。」(七六頁四行目)と語る英夫の正太郎への信頼感は異常なまでに強固なものである。これは炎天下での試合中、チームでただ一人の投手である自分に日蔭をつくってくれた正太郎への感謝の気持ちから生まれたものと考えられる。また、英夫は決勝戦の日蔭の思い出を自分たちにできないことはない、という自信を得たかけがえのないものとして大切にしており、その自信をもたらした正太郎のことを信頼しているとも考えられる。

しかし、死の淵まで追い込まれた常雄には、売り上げと奥さんを奪った正太郎の行為が本当に、「ぼくらのためになること」として受け止められているのであろうか。常雄は、「これはキャプテン命令だぞ」(七七頁一〇行目)と正太郎に言われて、彼の作った日蔭に入っていく。正太郎は、ふらついた常雄がためらうことなく日蔭に入ることができるように、「キャプテン命令」という言葉を使ったのだと読むことができる場面である。常雄も日蔭に入れてくれたことに対する感謝の気持ちは抱いているだろう。しかし、この二人の間には明確に上下関係、力関係が存在している。弱虫の八番打者である常雄と、主将兼捕手兼四番打者の正太郎のチーム内での立場の違いは明らかである。常に正太郎は指示や命令をする側で、

常雄はされる側なのである。それに逆らうことは、弱虫の常雄にはできないのだ。常雄の口から直接、正太郎観が語られることはないが、日蔭に入れてくれたという恩があるために、雇ってほしいという申し出を断れず、生活や家族、命を壊されかけたとしても黙っているしかないのである。弱虫の八番打者で正太郎についていく団子の内の一人であった常雄が、キャプテン正太郎に対して抱く感情には、恐れや遠慮、劣等感といったものが含まれているのである。

本作品は、「大会社の巨きなビルが野球場に覆いかぶさるように立っていた。この十何年かのうちに、ここには西日がささなくなってしまったようである。」(七七頁一六行目)という描写で締めくくられている。時代の変化、それに伴う新道商店街の移り変わりが象徴的に描かれている場面である。大会社のビルが作る蔭は過去から変わらぬ一種のヒエラルキーによる圧迫を暗示している。前者が変化を、後者が不変を意味している、という点に着目するならば、両者は対照的な関係を形成しているといえる。しかし同時に、新道商店街での生活にビルの蔭が覆いかぶさっているように、正太郎の作った蔭、ひいては正太郎が今なお、英夫や常雄たち新道少年野球団ナインに覆いかぶさり続け、彼らに暗い蔭をもたらしていることがこの描写に示されているのだ。「ナイン」は、先行研究や「ナイン」掲載教科書の教師用指導書に示されていた、信頼や友情だけでなく、キャプテン正太郎の蔭から抜け出せずに苦しむナインの姿

キャプテンという権力やナインの中に存在する序列といった、共同体の結びつきがもたらす負の側面を描き出しているのである。

三二 野球観が形成する正太郎観

かつてのチームメイトに対して詐欺をしまわっている正太郎。彼に対する中村さんと英夫の態度は大きく異なっている。中村さんは息子を騙した正太郎に強い怒りを覚え、名前を聞いただけでめしがまざるかとまで言っている。しかし、英夫は正太郎に騙されたにも関わらず、僕らのキャプテン正太郎は自分たちのためになることをしていると正太郎のことを信じている。正太郎観の違いにチームメイトとしてあの決勝戦を共に戦ったかどうか、という立場の違いが大きく影響していることは間違いないが、それだけでなく、中村さんの野球観が正太郎への態度に関わっていると考えられる。野球史を手がかりに当時の日本で野球が持っていた意味を明らかにし、それを基に中村さんが抱く野球観を追究することで、中村さんの正太郎観について考察を深めていく。

野球は一八七一年に中学校の英語教師として来日した、ホールズ・ウィルソンによって日本に伝えられたとされている。ロバート・K・フィッツの著書『大戦前夜のベーブ・ルース 野球と戦争と暗殺者』¹³の中で、そのときのエピソードが紹介されている¹⁴。

ウィルソンが教師として赴任したのは、全国各地の優秀な生徒を集

めて教育するエリート養成学校だった。後にこの学校が、正力松太郎の母校である東京帝国大学に発展するのである。ウィルソンら、西洋の教師たちはやがて、生徒がそろって病弱であることに気づいた。心身を鍛える運動を重視する西洋の教育とは対照的に、日本人は運動など学習の邪魔でしかないと考えていた。そのため、自分の体のために運動するという発想が日本人にはなかった。実際、日本にチームスポーツがないことからそれはわかるだろう。そこでウィルソンは一八七二年、生徒の体を鍛えるため、自分の好きな野球を教えることにした。

このように、野球好きのホーレス・ウィルソンが、病弱な生徒の鍛錬のために、教えはじめたことで日本に野球が伝わったとされているのである。

アメリカの国民的娯楽であったこのスポーツに日本精神を結びつけ、日本独自の野球観を作り上げていったのが第一高等学校野球部であった。当時の一高の学生は野球を自己犠牲、協調の精神、規律、礼儀などに象徴される武士道精神を表現する一つの手段としたのである。際限のない鍛錬によって、精神力を磨くことを野球における最も重要な要素と考えた、一高野球部の野球は「精神野球」と名付けられた。血の滲むような練習を重ねた一高野球部は一八九六年、横浜のアメリカ人チームに試合を申し込み、三戦全勝という結果を残す。この一高勝利のニュースから

野球への関心が一気に高まり、「精神野球」の考え方を受け継ぐチームが後を絶たなかった^{二五}。こうして精神修養の手段としての野球という日本独自の野球観の基礎が築かれることになるが、一九一九年に早稲田大学野球部監督となった飛田徳洲によって、さらに「日本野球道」という考え方に発展していく。前掲の『大戦前夜のベーブ・ルース』の中で、飛田の野球論が次のように紹介されている^{二六}。

「監督は選手を愛していなければならないが、少なくともグラウンドでは、心で泣きながらも、できるだけ残酷に選手を扱うべきである。それこそが勝利の秘訣なのだ。血反吐を吐くまで練習をしない選手に、勝てる見込みはない……練習の目的は、健康の増進ではなく精神の鍛錬にある。流星のようにヒットを打つ、能力以上の捕球をする……こうした美しいプレーは技術を習得すればできるというものではない……強い精神力があつてこそ可能なのである」

病弱な生徒のための運動としてウィルソンが伝えたベースボールが、精神鍛錬を目的とする日本独自の野球へと完全に変化していることが分かる。自らが課す練習を「死の練習」と呼び、精神の鍛錬を目的とした、この飛田の野球論が「野球道」と呼ばれるようになったのである。飛田の在任中、早稲田大学野球部は一三の大会で九度の優勝を果たし、日本一のチームとなる^{二七}。勝利という最高の結果を残したことで、飛田の野

球論が宣伝され、「野球道」の考え方が日本人の中に幅広く浸透していったのである。

「野球道」という考え方と共に日本人に受け入れられていった野球であるが、戦争が激しくなるにつれてアメリカ生まれのこのスポーツは敵性スポーツとみなされ、徐々に排除されていく。一九四四年には全面的に禁止されることになるのである。このように野球が弾圧される一方で、武道が奨励されていく。一九三九年には、尋常小学校五年以上の男子に準正課として、剣道と柔道が課せられるようになった^{二八}。戦争を背景に、国家の手によって野球否定、武道奨励が推し進められたのである。

戦時中、敵性スポーツとして弾圧されていた野球であったが、戦後わずか三ヶ月で試合が再開されるなど、並々ならぬ速度で復興を遂げていく。このような急速な野球復興には、GHQの日本占領政策、そしてそれを推進した人々が大きく関わっているのである。

日本での野球復興はGHQの最高司令官ダグラス・マッカーサー、GHQの経済科学局（ESS）局長ウィリアム・F・マッカート、マッカートの副官キャビー原田を中心に進められた。マッカートとキャビー原田は大の野球好きであり、日米関係に野球が果たす役割は大きいと考えていた。マッカートはマッカーサーから日本の野球に関する政策を全面的に委任され、キャビー原田は日本野球界とのパイプ役を務めた。日本経済を復活させることが主な任務であった経済科学局（ESS）は、経済復興と同時に日本のスポーツ復活、特に野球の復活に力を注いだ^{二九}。GH

Qは日本をアメリカ化、民主化するための外交手段として野球を利用することにしたのである。剣道、弓道、武道など、軍国主義に結びつく日本の伝統的スポーツを禁止し、アメリカ発祥のスポーツである野球を推奨したのである。一九四六年に夏の中学野球全国大会（現在の全国高等学校野球選手権大会）が再開されたのも、「戦争によって歪められた若き心をスポーツによってその本然の姿に立ちかえらせるとともに、野球を通じて民主主義精神の育成を助長すること」を期待してのことであった^{三〇}。

また、GHQは当時の日本野球連盟会長鈴木龍二、副会長鈴木惣太郎と協力し、プロ野球再開にも尽力する。一九四五年一月二三日には、日本野球連盟主催で戦後初のプロ野球の試合が神宮球場で開催される。食料、電気、住宅が不足し、貧困が蔓延していたにも関わらず、六〇〇〇人近い観客が観戦に訪れ、翌年からはペナントレースが再開されている。日本はまだ荒廃しており経済も停滞していたが、一五〇万人以上の観客が五円のチケットを買ってプロ野球を観戦したのであった。鈴木龍二は、

「アメリカは今、日本を占領している。アメリカとうまくつきあえなければ、日本国民はどうなるだろう？」^{三一}「野球はアメリカの国民的スポーツである。だからこそ今、日本で野球を再興しなければならぬ。利用すべきは兵器ではなく外交である。」^{三二}「野球は両国をつな

ぐ架け橋になる》

という言葉を残している。つまり、GHQだけではなく、日本側も野球を外交手段として捉えていたのである。このように、両者の思惑が合致していたことも野球の復活に拍車をかけたと考えられる。

さらに野球は、日米間の友好関係を高めることにも貢献した。キャピ―原田の著書『太平洋のかけ橋 戦後・野球復活の裏面史』^{三三}に、次のようなエピソードが綴られている^{三三}。

日本の労働組合運動が活発化して、これを抑えるための措置をマツカーサーがとつたことで労働者たちの占領軍に対する信頼感がうすれ、マツカーサーの占領政策は失敗に終わるのではないかと懸念されたときがあった。(中略)マツカーサーは日本の人心を安定させるための方策を、スタッフの一人一人にきいた。マツカーサーは心配していた。原田は元帥に野球が一番いいと答えた。野球には「コトバがいらぬい」からで、「バットとボールさえあれば、どんな国のひとも楽しくプレーできる」と説明した。マツカーサーは、「どんなチームを呼べばいいか」と聞いた。原田は、「サンフランシスコ・シールズが最適だと思います」と答えた。監督のレフティ・オドゥールをちよつと知っていたし、オドゥールは戦前二度も日本へきたこともあるので、日本になじみがあったからだ。マツカーサーはすぐ

計画に移すようにと原田にいい渡した。サンフランシスコに飛んだ原田は、オドゥールを通じてシールズのポール・フェーガン会長に会った。親善野球の趣旨を話すと、会長もオドゥールも賛成した。

占領政策の成功のために、という意味合いがあることは間違いないが、日本人の不信感を取り除き、両国の関係を構築していくうえで、やはり野球が効果的であると考えられていたことが窺える。

シールズは一九四九年一〇月に来日。キャピ―原田は開会式で米国旗とともに日の丸を掲揚し、君が代を演奏するという許可をとつていた。マツカーサーが親善のための行事で日本の国旗を掲げて国歌を演奏することには大きな意義があるとして、その決断を下したのであった。シールズ戦はNHKラジオで全国に放送されたため、球場に訪れた観客のみならず、ラジオを通して戦後初めての国旗掲揚と国歌演奏の瞬間に立ち会った、日本人の多くが感動を覚えたようである。

シールズは四週間滞在し、各地で一一試合を行った。この親善シリーズを通して五〇万人以上の入場者があり、熱狂する日本の野球ファンで球場はいっぱいになった。シールズが帰国する前、マツカーサーは、「君たちは親善と交流ということで政治家や軍人も果たせなかつたほどの大きな役割を果たした」、「史上最大の外交だった」と感謝の言葉を述べている^{三四}。また、シールズを率いたレフティ・オドゥールは、

「日本に着いたばかりのころはひどかった……日本人は……みんな元気がなく、私が『バンザイ!』と叫んでも返事をしない。何の反応もなかった。ところが一か月後に日本を去るときには、日本中が歓声を上げ、再び『万歳!』と叫んでいた」

と語っている^{二六}。日本を復興させ、活力を取り戻すという点においてもシールズの遠征は効果を発揮したのである。リチャード・ルーツインガー著『伝説のレフティ・オドール』^{二七}の訳者佐山和夫は同著のあとがきで、

あの忌まわしい戦争が終わったとき、私は小学校の三年生だった。和歌山市の戦災を目の当たりにした焼け野原っ子であった。腹はへついても、平和の到来は何よりうれしかった。敵機の飛ばない空、爆弾の落ちてこない広場に私たちはどんなに安心したことか。平和は白いものを携えて、私たちの前に現れた。白いものとは、野球のボールだった。野球は私たちにとって、平和の同意語だった。それを伝えてくれたのが「オドールさん」だった。彼が率いてきた「シールズ軍」のことを、私たちはどんなに興奮して新聞や雑誌で読んだことだろう。フランク・オドールは、まさに私たちの戦後の再出発の原点にあったといえる。

と述べており^{二八}、戦後日本において野球、そしてシールズの遠征は人びとに平和の訪れを感じさせる希望となっていたことが窺える。

このように日本の民主主義化や日米間の関係づくりのために野球を復興させていったGHQの影響は学校の運動部活動にまで及んでいく。戦後、運動部は生徒の自主性を尊重し、過度の練習に陥らず、誰もがスポーツを楽しめるような民主主義的なものでなければならなかった。

しかし、敗戦から一〇年が経った、一九五〇年代後半から勝利至上主義や上下関係、非科学的なトレーニングといった戦前復帰が起こる。野球部においても、野球は精神の訓練を通じて人格を磨く道具であるという主張がなされるようになったのである。それには、日本が戦中・戦後の困難を乗り越え、高度経済成長を成し遂げたということが大きく関わっていた。戦後復興から高度経済成長へと向かう中で、日本人の中に忍耐や努力、根性といったものが強固な信念として定着したのである。そして、それらの信念が野球と結びついて、集団の秩序を尊び人格形成を目的とする、戦後の「精神野球」「野球道」というものが定着していったのである。さらに、一九六六年から『少年マガジン』に連載された「巨人の星」をはじめとするスポーツ根性漫画の登場により、一層根性とスポーツが結びつきを強めていくこととなる^{二九}。集団における協調性を意味する和の重要性が説かれるようになり、個人主義は反社会的行為とまでみなされたのである。戦時中の敵性スポーツから国民的スポーツへと劇的に姿を変えた野球の中には、集団主義、根性、忍耐といった価値観

を垣間見ることができるのである。

「日本野球道」という言葉で表される、精神修養や人格形成のための野球では、集団を尊ぶ協調性や自己犠牲の精神が重視される。戦後日本を生き、その野球に触れてきた中村さんにとって、かつてのチームメイトを騙す正太郎の行為はチームの和を乱す行為、「野球道」に反する行いとして受け止められているのではないだろうか。ベースボールと野球の違いから日米文化を捉えようとしたロバート・ホワイティングは、日本野球において個人主義がどのように見なされているのか、ということについて次のように述べている^{三〇}。

日本では、スターであっても、それにふさわしい振る舞いをするところが期待されている。チームにとってどんなに価値のある選手でも、彼は昔からある規則や規制に従い、球団の和を守るようベストを尽くさなければならぬ。日本ではコジンシュギという言葉は、いまだに強い否定的な含みをもっているのだ。西洋の価値観の流入にもかかわらず、である。日本人の理屈によれば、チームなくては個人もないのである。だから、チームを分裂させるような自己中心的な振る舞いは、けっして許されはしないのだ。

正太郎の詐欺は、チームを分裂させる自己中心的な行いであり、反社会的行為とまでみなされた個人主義的な行いなのである。

また、作中現在で五〇歳代、作中過去で三〇歳代と推測される中村さんは、終戦当時、前述の佐山和夫と同じくらいの年齢であったと考えられる。佐山だけでなく、野球の失われた生活が戦争の激化と結びついてきた人々にとって野球の復活、シールズの遠征というものは平和の訪れであり、希望であったのではないだろうか。戦時中失われていた野球の復活は、GHQによる占領政策の一つとして、押し進められたという側面を持っていた。しかし、佐山も述べているように、実際にそれを目の当たりにした子ども(中村さん)にとっては荒廃していた日本に活気が戻って来た、野球が出来る平和な日々が訪れたという意味合いが強く感じられていたのではないか。そして、野球が日本の希望であったように、中村さんにとって新道少年野球団は自分たちの街の希望であったのである。王貞治の新政権発足を報じる新聞記事にあるように、作中現在に於ける一九八三年にジャイアンツとライオンズが最終戦にまでもつれ込む熾烈な日本シリーズの戦いを繰り広げている^{三一}。それにも関わらず、中村さんはライオンズもジャイアンツも問題でないというほどに力の入った調子で当時の新道少年野球団の強さを語るのである。中村さんは街の希望であった、新道少年野球団の躍進と当時の商店街の活気を重ねあわせて思い起こしているのである。正太郎は大人になってからも、かつてのチームメイトに対し、詐欺行為をはたらくことによって暗い蔭をもたらしている。その行為は、中村さんが抱いていた希望を壊すものであり、正太郎が希望を打ち砕くのと重なるように、新道商店街も都市化

によって大会社のビルの暗い蔭の中に入り、活気を失っている。

戦後復興の希望としての野球に触れ、新道少年野球団にわが街のチームとしての希望を抱いていた中村さんであるからこそ、正太郎の詐欺に強い怒りを覚えているのである。このように、決勝戦における立場の違いのみならず、世代によって抱く野球観が正太郎観に影響しているのである。

三三 「ナイン」が野球である意味

野球というスポーツは日本に入ってきた初めての集団スポーツであり、心から日本人に愛され「道」の思想につながったものである、ということが、本作品が野球である意味を考察するにあたって重要な観点になると考える。池井優は『野球と日本人』^{三三}で、外来スポーツの中で訳語が定着しているものは野球、卓球、陸上競技の三つであるとしたうえで、野球と「道」について次のように考察している^{三三}。

しかも野球には「道」がつく。野球道である。訳語が定着している卓球、陸上競技といえども、卓球道、陸上競技道という言葉は聞いたことがない。野球に限って、日本古来の武道である剣道、柔道、弓道などと並び、単なるスポーツとしてだけでなく競技する以前の練習に、あるいは競技を通じて精神修養、人格の向上などを盛りこむものへと変わっていったといえるのではないか。

ここで触れられているように、野球は精神修養や人格向上の手段としてアメリカのベースボールとは異なる日本独自の形で普及していったのである。毎夏に阪神甲子園球場で開催される全国高等学校野球選手権大会に代表されるように、チームや仲間のために自己を犠牲にする精神や協調性といったものが日本野球においては賛美される。

また、五輪やWBC(World Baseball Classic)といった国際大会において日本のナショナルチームは、「スモールベースボール」という指針をよく掲げている。これは、体格やパワーで劣る他国のチームに勝つために、犠牲や盗塁といった小技を絡め、投手を中心に勝ち野球で戦おうとする姿勢である。戦術的、技術的なレベルでの取り組みのように思われるが、ここにも「野球道」の思想が垣間見えるのである。つまり、個人の能力で劣ると考えられている(二〇一五年現在においては世界で対等に戦える選手も多数輩出しているが)日本選手が勝利を掴むためには、チームのため、さらには日本という国のために自己を犠牲にし、チームの和を尊ぶことが必要不可欠であるとされているのである。高校野球だけではなく、ナショナルチームのレベルでも「日本野球道」という思想が浸透しており、その思想に基づく選手の姿勢やプレーが美しいものとして評価されるのである。日本代表チームの愛称が「侍JAPAN」であるということからも、そのような価値観を垣間見ることができらるだろう。さらに、WBCや日本シリーズ、甲子園大会といった一敗も許されな

い、一回性に基づく大会においては、一層「野球道」の精神が選手や観衆、マスコミの間で高揚する。

二〇一三年当時、東北楽天ゴールデンイーグルスに所属していた田中将大投手（現ニューヨーク・ヤンキース所属）が読売ジャイアンツとの日本シリーズで連投し、チーム史上初の日本一に貢献したことは記憶に新しい。田中投手は二〇一三年一月二日の日本シリーズ第六戦に先発登板し、完投するも負け投手となっている。その試合で投じた球数は一六〇球であった。本来であれば、先発投手は登板後、五、六日間の休養・調整期間をとって次の登板に備えるのだが、勝った方が日本一になるという最終第七戦にも田中投手は登板したのである。一六〇球を投じた翌日（一月三日）に行われた第七戦に、田中投手は登板を志願する。首脳陣はその要望を受け入れ、最終回のマウンドに田中投手を送り込んだのである。彼はこの試合で一五球を投じ、結果として胴上げ投手となる。田中投手はたった二日間で一七五球もの球数を投じたのである^{三四}。このことは、物議を醸しだした。田中投手は、翌シーズンからのMLB(Major League Baseball)移籍が確実視されていたこともあり、海外メディアからは肩や肘の酷使を危惧する声があがったのである。しかし、日本では、登板を志願した田中投手の勇気が、震災からの復興を目指す東北に勇気と感動を、そして、チームに初めての栄冠をもたらしたとして高く評価する声があがった。田中投手の、チームのために己の身を削る力投が感動ドラマとして受け止められたのである。さらに、日本シリーズの

最終盤であったからこそ許された連投で、肩や肘を壊すことはないだろう、という声やMLB球団にも連投をマイナスのこととしてではなく、勇気として評価をしてほしい、という声まであげられたのであった^{三五}。チームのために自己を犠牲にするという田中投手の意気込みと姿、そしてそれに対する評価から、現在においても「野球道」の精神が深く根付いていることが窺える。

ロバート・ホワイティングは、ベースボールが「道」の概念と結びつき、日本人の心を掴んだ要因について次のように考察をしている^{三六}。

野球が日本人全体の心をとらえたのは、つまるところ、それが彼らの国民性に合致していたからに他ならない。日本人は、集団のなかにアイデンティティを求める民族だといわれている。が、不思議なことに、彼ら自身で発展させた競技は、剣道にしろ相撲にしろすべて一対一の戦いで、集団で行う競技は生み出さなかった。そんなところへ持ち込まれた野球は、スポーツのうえで、日本人特有の集団意識を表現するすばらしい機会を与えた、というわけである。

一対一の個人競技しか持たなかった日本人にとって野球は、それまでスポーツの場では表現することができなかったアイデンティティの表現に適したものであり、集団主義という精神構造と結びついたことで受容されていったとされている。このようにして日本に浸透していった野球は、

日本人に愛されている。前掲の池井優『野球と日本人』の中で、次のような数値が紹介されている^{三七}。

「テレビで見たいスポーツは何ん(イ)ですか」一九八八年六月、NHKの世論調査部が「日本人とスポーツ」という調査を行った。しているスポーツのトップはゴルフ、これからやってみたいスポーツは水泳とゴルフ、そしてテレビで見たいスポーツは、高校野球が五八パーセントで第一位、二位はプロ野球五四パーセント、三位マラソン四六パーセント、四位バレーボール四一パーセント、五位大相撲三九パーセントとなる。男女別で見ると男性ではプロ野球が六九パーセントと断然トップ、女性では高校野球が五四パーセントでトップ、すなわちプロ野球、高校野球を合わせると、日本人はいかにテレビ中継を通じて野球を見たがっているか、あるいは現に見ているかがわかる。

「ナイン」発表から五年後のデータではあるが、戦時中、敵性スポーツとみなされていた野球が日本の戦後復興とともに復活し、一九八〇年代においては国民的スポーツ、国民的娯楽として日本人に愛されるスポーツとまでなっていたということが窺える。また、同著の中では、この調査から一〇数年前にあたる石油ショック時の野球にまつわるエピソードも紹介されている^{三八}。

昭和四八年石油ショックが日本全国を混乱に陥れた時のことである。関西の尼ヶ崎では「トイレットペーパーがなくなる」とのうわさがまたたく間に主婦の間に広がり、スーパーマーケットに行列ができた。トイレットペーパーのみならず、石けん、洗剤、灯油……、口から口へ物不足がささやかれ、買いだめに走ったのだった。またエネルギーを節約する「省エネ」が合言葉となり、「冷房は一八度に」「ノータイ・ノー上着運動」の呼びかけが行われ、大平首相、江崎通運相も半そで、簡易ネクタイの省エネルギーを着こんで、新聞社のカメラの前でポーズをとった。街のネオンは消え、石油を全面的に海外からの輸入に依存している日本の弱さを一般の人々は初めて知ったのであった。その時出たひとつの案が、テレビの高校野球の中継をやめたらどうかであった。この案に対し、国会では自民党から共産党にいたるまで反対。「国民的行事」となっている高校野球の中継を中止するとは何事だ。節約するものは他に沢山あるというのである。

国を挙げて省エネに取り組んでいる中でも、高校野球は「国民的行事」であるからという理由でテレビ中継の中止を免れているのである。これらのエピソードからも、少なくとも一九七〇年代から一九八〇年代の間では野球が日本人の生活になくはならないものとなっており、日本人

に愛されるスポーツであったことが分かる。

日本人の精神性と結びつき、生活の一部として愛されるようになった野球。では、「ナイン」に描かれているのがその野球であることには、どのような意味があるのだろうか。

一つには、広く読者にそれぞれが抱く野球観に基づく感情を喚起する、ということが挙げられる。日本人の生活に根付いた野球は直接球場に足を運んだ観客のみならず、テレビやラジオ、新聞といった様々なメディアを通して多くの人々に届けられている。夏の甲子園大会を筆頭として、熱戦の模様や各チームのエピソードがドラマティックに伝えられ、そこに人々は感動を覚えるのである。「ナイン」も野球を描いたことで、一人一人の読者の野球観に基づく様々な感情を喚起する物語となっているのである。毎夏、高校野球をめぐるドラマに感動を覚える人は、新道少年野球団ナインの決勝戦でのドラマに感動を覚えずにはいられないだろう。そして、チームワークの美しさや一対一の武士的な気力のぶつかり合いに野球の魅力を感じている人は、新道少年野球団が炎天下の中、子どもたちだけで気力を振り絞って戦い抜く姿、一人でマウンドに立ち続ける英夫の姿に感動を覚えるだろう。また、集団を尊び、チームのために己を犠牲にする「野球道」の思想を信仰している人々は、従来の解釈にもあったように、西日を遮る正太郎の姿に自己犠牲の精神の美しさを感じ得るだろう。逆に、「野球道」の思想を持っているが故に、中村さん同様、作中現在においてその思想に反する行いをした正太郎に激しい憤りを感じ

じるかもしれない。このように、「ナイン」は読者が野球に対して抱いている感情を喚起する、つまり、それぞれが抱いている野球観を、作品を通して浮き彫りにするのだ。そして、野球が国民的スポーツとしての地位を獲得しており、様々な媒体を通して多くの国民に共有されていたスポーツであるからこそ、より多くの読者の感情を喚起することができる作品となっているのである。「ナイン」が野球である意味の一つはここにあるのである。

もう一つ、「ナイン」が野球である意味として、集団や共同体における個人の心理を描くことができる、また、それを読者に想像させることができるという点が挙げられる。日本人がもつグループ思考を表現するのにはベースボールが適していたロバート・ホワイティングは、ベースボールと野球は似て非なるものであると捉えている。そして、日本の野球選手がグラウンドの内外で守るべきであるとされている一二の規則を挙げており、その一二条には、以下のように示されている。

第一二条 選手は、チームの調和と団結の維持に努めなければならぬ――

「掟」に従えば、チームは、関係者すべてが自己の職分を知り、あたかもひとつの調和のとれた部隊のように、全員一丸となって機能するとき、もっとも効率的に動けるのである。日本のチームでは、感情過多のタイプは自分の立場をもたない。クラブ・ハウスでけん

かをおっぱじめる選手やいたずら好きの選手は、アメリカ・チームでは「緊張緩和剤」になりうる。しかし、日本では緊張の原因ではない。

日本の良いチームとは、抗議せず、苦情をいわず、他を批判せぬ選手から成り立つチームである。そんなことはコーチング・スタッフにまかせておけ、というわけだ。よいチームは美しい日本庭園と似ている。あらゆる木、あらゆる石、あらゆる草の葉が、おのおのその所を得て並んでいる。たとえ一つの小さな部分でもその場所をはずれば、全体の美を壊すことになる。石や木はひとつずつ見ても美しいかもしれぬ。しかし、正しく組織されれば、庭は個々の部分の集積以上のものとなる。それは芸術作品となる。それは完成となる。個々の選手のエゴが私心を去って他の二五人と合体し、ひとつの巨大なエゴを作るとき、魔法にも似た何かが生ずる。チームの選手が払った努力や犠牲はついにむくわれるのだ。チームは今や完全な機能を果たすひとつのユニットにほかならない。「私は読売ジャイアンツだ」といえることの誇りに勝るものは何もない^{三九}。

野球は、集団スポーツでありながら一対一の勝負が随所に散りばめられており、さらに、打順やポジションなどによって役割が大きく異なる、というように個々の選手の集合によってチームが成り立っているのである。自己犠牲やチームの和を尊ぶ日本野球では、その個々の選手がチームから求められた役割を全うすることが求められており、自己を表現す

ることよりもチームの方針に沿った姿を表現することがよしとされている。

しかし、ロバート・ホワイティングの表現でいう木や石、草の葉であり、個々のエゴを持ったそれぞれの選手達の中には、庭園全体の美のために、すなわち、チームのために自己を殺すことへの葛藤やそれぞれの立場からのチーム観があるはずである。では何故、選手達はチームのための自己であることを受け入れることができるのだろうか。それは、野球が日本人にとって国民的スポーツであり、ロバート・ホワイティングの言う日本人の伝統的な精神性と結びついているからである。ロバート・ホワイティングが挙げている一二の規則は、明文化されているわけではない。「日本野球道」というものも、明確に守るべきルールとして示されているわけではない。しかし、それらは暗黙の了解として受け継がれてきたものであり、無意識的であってもチームのための自己であることを選手達は強要され、それに反する行為は批判の対象となるのである。

「ナイン」は、その野球を題材としたことで、野球チームというひとつの共同体の中で「野球道」という言葉のもとに押し込められ、普段は見えないようにされている、個人の思想やチーム内におけるそれぞれの立場によって異なる、チームや野球の見え方を描くことができたのである。同じ野球に同じチームで打ち込んでいても中心選手とそうでない選手、レギュラー選手と控え選手ではその見え方、それに対する感情は異なる。主将兼四番打者兼捕手の正太郎、エースピッチャーの英夫、弱虫

の八番打者である常雄、その他の選手がチームや仲間、野球に対して抱く感情はそれぞれであるはずである。これは、作者である井上ひさし自身の野球体験が影響している部分があると考えられる。彼は中学校に野球部を創設し、最初は投手で四番打者を務めていたが、次第に中心選手の座から滑り落ちていつている。そして、最終的には自らが創設した野球部を退部しているのである。その変化の中で、立場によって見え方が変わる野球やチーム、野球チームの中に存在する権力や序列というものを感じたのではないだろうか。ナインそれぞれの感情というものは、異なる役割や思想を持ちながらも、「野球道」という概念のもと自己犠牲を強いられ、思想を統一された個人の集合体である野球だからこそ描くことができた側面なのである。

四．「ナイン」の主題とは

「ナイン」の主題は、国民的スポーツとして多くの人々に愛されていた日本野球の内実を詳細に描いたことで、読者の野球観に基づく感情を喚起させる物語となっているということである。これは、「ナイン」が野球である意味⁴¹で論じた内容と大きく重なる部分である。やはり、「ナイン」を解釈するにあたって野球は無視することのできない重要な要素となっているのだ。ロバート・ホワイティングは、日本の野球について、

一見したところ、日本で行なわれている野球も、アメリカ産のそれ

と同じものという印象だ。だが、実際はそうではない。集団への帰属、協力、勤勉、年功序列、面子などを重視する日本人の人生観は、このスポーツのほとんどすべての局面に浸透し、日本の野球を日本独自のものとしている。

と述べている⁴²。日本に浸透していった野球には日本人の人生観が投影されているとまでしているのである。「ナイン」は野球を題材として取り上げ、新道少年野球団ナインの姿を描くことで、日本で行われている野球をロバート・ホワイティングが言うような日本野球としている、個々の選手たちの在り方を記しているのである。正太郎が日蔭を作り出す場面、英夫が体力の限界を迎えても一人でマウンドに立ち続ける場面、ナインがキャプテン命令に従う場面など、随所にロバート・ホワイティングの言う「野球道」の思想に基づく選手の姿が見られる。

日本野球では自己犠牲の精神、チームの和、協調性といったものが最重要視され、選手達にはそれらの精神を体現することが求められている。そのような日本野球を賛美する視点に立てば、「ナイン」は、読者に感動をもたらす新道少年野球団ナインの友情や信頼の物語として集約されていくだろう。

しかし、「ナイン」にはそれだけではなく、そこからもう一步踏み込んだ日本野球の内実が描かれている。つまり、自己犠牲やチームへの忠誠といった集団心理を強いられている選手たち個人の心理、共通の集団心

理のもと対等に結びついていると考えられている、野球チームの中に存在する権力や序列といったところにまで迫っているのである。日本野球では、チームが何よりも優先される事項であり、個々の選手の心理は中々焦点化されない。「ナイン」は、チームの構成要素としてしか捉えられていない個々の選手に焦点を当てることで、日本野球において賛美されている価値観がもつポジティブな側面とネガティブな側面の両面を踏まえた、ありのままの日本野球の姿を描いたのである。これこそが「ナイン」の大きな魅力であるとともに、この視点から描いたからこそ、「ナイン」は多くの読者が野球に対して抱いている感情や、野球観を喚起させる物語となり得ているのである。

「ナイン」が野球である意味」の部分でも述べたように、「ナイン」が発表された一九八三年前後の時代において、野球は国民的スポーツの地位を獲得していたと考えられる。様々な媒体を通して多くの国民に共有されていたのである。そして、それを受け取っていた人びとの中には、それぞれの野球観が形成されていたのではないかと考える。野球を通して生み出される選手たちのドラマに感動を覚える、一対一の武道的要素に魅力を感じる、「野球道」の思想を強く信仰するなど、その在り方は多種多様であっただろう。各人が、自己が胸に抱く思想の体現を野球の中に見出し、その野球観に基づく感情を喚起させられていたのではないだろうか。「ナイン」が新道少年野球団というチームだけに焦点を当てた作品であったならば、これだけ多様な野球観を喚起することは難しい。一

面的な新道少年野球団の野球観、思想のみを読者が受け取るようになるからである。

しかし、「ナイン」は新道少年野球団を構成している、英夫や常雄といった個々の選手に焦点を当てることで、チームの中の個人の思想を描いたり、それを読者に想像させたりする作品となっている。中心選手とそうでない選手、キャプテンとそれ以外の選手の姿や思想が描かれることで、読者はより多面的な日本野球の姿を受け取ることになるのだ。

「野球道」という思想のもと、国民的スポーツとして多くの人々に共有されていた野球の姿を、チーム、そして個人の視点から描いたことで、読者の野球観を浮き彫りにし、それに基づく感情を喚起する、という点が「ナイン」主題であると考えられる。「ナイン」は「都市の変化」と「商店街の変化」と「人々の関係性の変化」を描いただけではなく、そこに重要な要素として「野球観」を導入した作品なのである。「われら自身の物語」という連作にあって、他でもない「野球」を題材とし、「ナイン」というタイトルを冠したほど、野球にまつわる歴史的・文化的背景はこの作品にとって重要なのである。

五. まとめ

研究の成果として次に示す二点が挙げられる。

まず、井上ひさし「ナイン」を多面的な読みが可能な作品として位置づけることができた、という点である。本作品は従来、「ナインの友情や

信頼、絆」を主題として解釈されてきていた。しかし、共同体という視点を作品読解の中心として、作中に描かれているポジションや世代、チーム内における立場や役割といったものに詳細な意味づけを行ったことよって、従来とは異なる、新たな解釈の可能性や「読者の野球観に基づく感情を喚起させる物語」という作品主題を提示することができた。

二点目は、「ナイン」が他でもない野球を描いた意味を追究することができた、という点である。「ナイン」は作品タイトルにもある通り、サッカーでもバスケットボールでもなく、野球を描いた作品なのである。野球史を手掛かりにして、日本人にとつての野球というものを明確にすることで、「ナイン」は野球を描いたからこそ、より多くの読者の野球観に基づく感情を喚起することができた。また、共同体の中で様々な立場に位置している個人の心理を描くことができたのだと意味づけられた。

監修者附記 本論文は平成二六年度に信州大学教育学部へ提出された卒業論文を基に執筆された。監修者は一般的な研究指導を行ったに過ぎず、調査・考察・執筆に至るまで、本論文は田中伸の単著であることを明記しておきたい。(友田義行)

注記

一 三省堂(二〇一四)、『明解現代文B』、一〇〇頁

二 宮田茂(一九八九)「ナインの友情」、『国語教室』第三六巻、大修館書店、一九頁

三 前掲「ナインの友情」、『国語教室』第三六巻、大修館書店、一九頁

四 川田裕美子(一九九五)「ナイン」(井上ひさし)について—生き続ける友情の絆」、『国語教室』第五四巻、二二・二二頁

五 大屋敷全(二〇〇八)、「読みが深化する授業を目指して—時代背景、対比を意識した「ナイン」の読解」、『月刊国語教育』第二八巻、東京法令出版、一六頁

六 渥見秀夫「井上ひさし『ナイン』の中の「ナイン」と「握手」」(『愛媛国文と教育』第三七巻、二〇〇四、一頁)

七 同前、三頁

八 大修館書店『高等学校新現代文指導資料』、一九七〇年、六三頁

九 教育出版『新編国語口教授資料現代文編②』、一九九九年、小説(二)二一八頁

一〇 稲井達也(一九九五)、「井上ひさし「ナイン」を教える—物語の仕かけの向こうへ」、『国語展望』第九六巻、尚学図書、二五頁

一一 高澤健三、井筒満、夏目武子他「井上ひさし「ナイン」「握手」をめぐって」、『文学と教育』第二一六巻、文学教育研究者集団、二〇一二、二二頁

一二 ロバート・ホワイティング著鈴木武樹訳『菊とバット プロ野球にみるニッポンスタイル』、サイマル出版会、一九七七年一月、三三頁

一三 ロバート・K・フィッツ著山田美明訳『大戦前夜のベーブ・ルース 野球と戦争と暗殺者』、原書房、二〇一三年一〇月

一四 前掲『大戦前夜のベーブ・ルース 野球と戦争と暗殺者』、二三二・二三三頁

一五 前掲『大戦前夜のベーブ・ルース 野球と戦争と暗殺者』、二三四・二三八頁

一六 前掲『大戦前夜のベーブ・ルース 野球と戦争と暗殺者』、二三九

- 頁
- 一七 前掲『大戦前夜のベーブ・ルース 野球と戦争と暗殺者』、二三九・二四〇頁
- 一八 坂上康博『につぼん野球の系譜学』、青弓社、二〇〇一年七月、一七三頁
- 一九 キヤピー原田『太平洋のかけ橋 戦後・野球復活の裏面史』、ベースボール・マガジン社、一九八〇年六月、六二頁
- 二〇 前掲『大戦前夜のベーブ・ルース 野球と戦争と暗殺者』、三六五頁
- 二一 前掲『大戦前夜のベーブ・ルース 野球と戦争と暗殺者』、三六五・三六六頁
- 二二 前掲『太平洋のかけ橋 戦後・野球復活の裏面史』
- 二三 前掲『太平洋のかけ橋 戦後・野球復活の裏面史』、八六・八八頁
- 二四 前掲『太平洋のかけ橋 戦後・野球復活の裏面史』、九一・九二頁
- 二五 前掲『大戦前夜のベーブ・ルース 野球と戦争と暗殺者』、三六九頁
- 二六 リチャード・ルーティング著佐山和夫訳『伝説のレフティ・オドール』、ベースボール・マガジン社、一九九八年一月
- 二七 前掲『伝説のレフティ・オドール』、一三五頁
- 二八 前掲『につぼん野球の系譜学』、二二五・二二〇頁
- 二九 前掲『菊とバット プロ野球にみるニッポンスマイル』、一五七頁
- 三〇 報知新聞社『報知新聞』、一九八三年一月八日、五面
- 三一 池井優『野球と日本人』、丸善ライブラリー、一九九一年六月
- 三二 前掲『野球と日本人』、七頁
- 三三 毎日新聞社『毎日新聞』、二〇一三年一月四日、一八面・一九面
- 三四 産経新聞社『産経新聞』、二〇一三年一月六日、一九面
- 三五 ロバート・ホワイティング著玉木正之訳『和をもって日本となす』、角川書店、一九九〇年三月、八四頁
- 三七 前掲『野球と日本人』、一七〇頁
- 三八 前掲『野球と日本人』、九頁・一〇頁
- 三九 前掲『菊とバット プロ野球にみるニッポンスマイル』、四二頁
- 四〇 前掲『菊とバット プロ野球にみるニッポンスマイル』、七頁
- (二〇一五年十一月十二日 受付)
(二〇一六年 二月一〇日 受理)